

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

政党ロゴの利用と「選挙による政権交代」

田中季歩 (東京大学大学院博士後期課程)



キャンペーンでピンバッジを配る PKR (PH) 支持者。左手前の黄色いボードは投票用紙を模したもので、PKR ロゴの横に×印がある。後ろには大量の PKR と BN の旗。(筆者撮影)

先の第 14 回総選挙期間中のマレーシアでは、あちこちに何十枚、何百枚もの政党ロゴの旗がひらめいていた。各政党(連合)の旗が、およそ各々の支持者の多そうな地区で見られたが、複数の党の旗がひしめき合っている場所もあり、「接戦」と予想された選挙戦の行方を物語っているようでもあった。

それにしても、なぜあれほど多くの旗が掲げられるのだろうか。その理由のひとつは、マレーシアの選挙における投票の仕方にあるだろう。マレーシアでは、投票用紙に候補者名と所属政党のロゴが印刷されており、投票したい政党のロゴの横に設けられた空欄に印を書くことで投票を行う。したがって、有権者が投票したい党のロゴを視認できることの重要性が、少なくとも日本よりは遥かに高いと考えられる。

ところで、今回歴史的勝利を収めた希望連盟 (PH) が、選挙期間中、水色の地に目の形の図、両端に赤い帯の入ったロゴを使用しているのに気づいた方も多だろう。これは PH 独自のロゴではなく、PH を構成する党の一つ、人民正義党 (PKR) のものだが、今回の選挙では、PH 構成 4 党が統一してこのロゴを使用した。背景には、マハティール率いる統一プリブミ党 (PPBM) の活動が書類提出の未了を理由に停止され、政党連盟として PH が公認されず、よって PH ロゴの公式使用も不可能になった、という事情があった。

PKR への一本化が決定されるに至った経緯は明らかにされていないが、実質的な使用可能性があった PKR と民主行動党 (DAP) のものを比べ、どの政党の支持者も比較的抵抗なく受け入れやすく支持しやすいであろう PKR が選ばれたと考えられる。PKR の実質的リーダー、ア

ンワル・イブラヒムの求心力も意識されただろう。

華人系が中心的支持層である DAP のロゴの使用は、プミプトラ (マレー系と先住民の総称) 票の動揺につながる懸念から難しかったと考えられるが (実際、マレー系の中には、DAP の政権本格参入によるプミプトラ向け政策の撤廃を不安視する向きもあった) DAP の党内や支持者からは、長年党のシンボルとなってきた「ロケット」のロゴを初めて封印することへの不安や不満の声もあり、DAP は難しい判断を迫られたと言える。しかし、DAP が自党のアイデンティティーを一旦留保してでも、PKR ロゴのもとで他党と共に戦ったことが、PH の連携を目に見える形で表し、結果的に念願の政権交代につながった、と見ることもできるだろう。

さて、旧与党連合の国民戦線 (BN) も、選挙期間中おなじみの濃い青地に秤マークのロゴを「活用」していた。大量の旗を道路際でなびかせるだけでなく、駅の大スクリーンに広告を 4 言語切り替えで表示させたり、バスの車体にも広告を打ったりと、圧倒的な資金力を感じさせるキャンペーンが繰り広げられていた。ロゴや広告の利用などは序の口で、BN は選挙区割り変更や平日の投票日設定など、持てる力を存分に利用し、「順当な」勝利に向けた準備を整えていた、はずだった。

しかし実際には、一票の格差が何倍あると、平日であろうと、多くの人々が投票日前から自分の投票地である故郷へと移動し、投票当日も暑さの中、投票所となったいくつもの学校に、何十分待ちという行列を作った。与えられた条件のもとで、限られた機会を大切に、希望を叶えようとする 今回の「選挙による政権交代」の実現は様々な要因によるものではあれ、マレーシア社会やそこに生きる人びとのそのような特性にも支えられていたのではないかと筆者は思う。PH による PKR ロゴの統一使用にも、権力側の恣意 (しい) や圧力に直面した際に、真正面から対抗するのではなく、残された可能性をうまく利用し、結果につなげようとする そんなマレーシア社会や人びとの特性が表れていたのかもしれない。

< 筆者紹介 >

1992 年生まれ、埼玉県出身。東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程在籍。修士 (学術)。専門はマレーシア地域研究。教育や就業・社会階層の変動について社会学的なアプローチから明らかにし、それをマレーシア社会の発展の文脈に置き直すことを試みている。